



独立行政法人 国立病院機構

四国こどもとおとなの 医療センター

アートプロジェクト

— 今月のショット —



2016年 2月号

— 院内の小さな声から —

「笙の笛を吹けるのですが、ボランティアでできることはありますか?」とお問い合わせ頂きました。その方は長年金比羅神宮で雅楽の演奏を担当し、その指導にも携わっておられた方です。娘さんが当院に長期入院されていて、病棟で毎月開催されるバイオリンのコンサートを見て、自分にも何か出来ることがないかと申し出てくださったのです。聞くところによると雅楽は元々善通寺と深いつながりがあるとのこと。中国に留学され、密教の教えを持ち帰ろうとしていた弘法大師空海に感銘を受けた7人の雅楽師が共に日本に渡った。それがそもそも日本における雅楽の始まりであるということでした。ただ、当時はまだ仏教が広まっていなかったため、現在の宮内庁がその身を擁護し、大切に広めた。とのこと。空海が小麦を持ち帰ったという話は有名なようですが、雅楽にも関わっていたとは驚きでした。それにしても香川県の観光地としてお隣同士の善通寺と金比羅神宮が雅楽を通じてつながるなんて。なんだか嬉しいことでした。



— 第2回ボランティア感謝祭 —

2月25日、4階こもれびホールにて第2回虹色ボランティア感謝会が開催されました。この会は、地元善通寺だけでなく全国各地にいる虹色ボランティアさんのメンバーが集まって、年に一度だけ顔を合わせ、お互いの活動を知る貴重な機会です。現在56名が活動してくださっていますが、その半数以上は全国各地から患者さんへのギフトを制作して送付して下さる「ものづくり」ボランティアの方々です。その他にもコンサートを開催したり、読み聞かせをしたり、お絵描きのワークショップをしたり、院内のお花を生け替えたり、患者さんの気持ちがちょっぴり安らぐような「もの」や「時間」の贈り物をするのが主な活動です。はじめに中川義信院長から、日々の活動に対し感謝と労いの言葉があり、中でも継続的かつ精力的に活動をしてくださっている7名のメンバーさんに感謝状が送られました。担当窓口のアートディレクターから当院における虹色ボランティアの意義の説明と活動報告をした後、それぞれが作って持ち寄ったギフトを手に取りながら、楽しく歓談しました。虹色ボランティアのルールは一つだけ。「自分のしたいことを楽しみながら」誰かが楽しみながらしてくれることほど軽やかな奉仕はありません。「しなければならぬから」とか「かわいそうだから」と義務感や正義感ですることには独特の「重さ」があります。上から目線でスタートしてもボランティアは長続きしません。楽しめることじゃなければ結局は続かないのです。そして何より「哀れみ」は助ける側と助けてもらった側との間に強者と弱者の関係性を暗黙のうちに描いてしまいます。それは時に奉仕を受けた方の「自尊心」を深く傷つけてしまうこともあります。「私も病気で辛かったから。あの時こんなことしてくれて嬉しかったから。いつ私が病気になるかもしれないから」と自分のこととして捉えて同じ目線で「共に」病気と向き合ってくれる仲間を患者さんは必要としています。最後に看護部長さんから、「患者さんだけでなく職員にとっても癒しになっています。」と感謝の言葉が伝えられると皆さんの表情がぱっと明るくなりました。当病院内にある19カ所の小さな扉の向こうで待っている贈り物やメッセージ、気持ちが柔らかくなるちょっとした時間は、こうして、「病院を優しい場所にしたい」と想いを同じくするメンバーさんによって支えられています。

作家名: 光島 貴之 「モコモコと青いさんかく」